

Pichari ~ピチャリ~

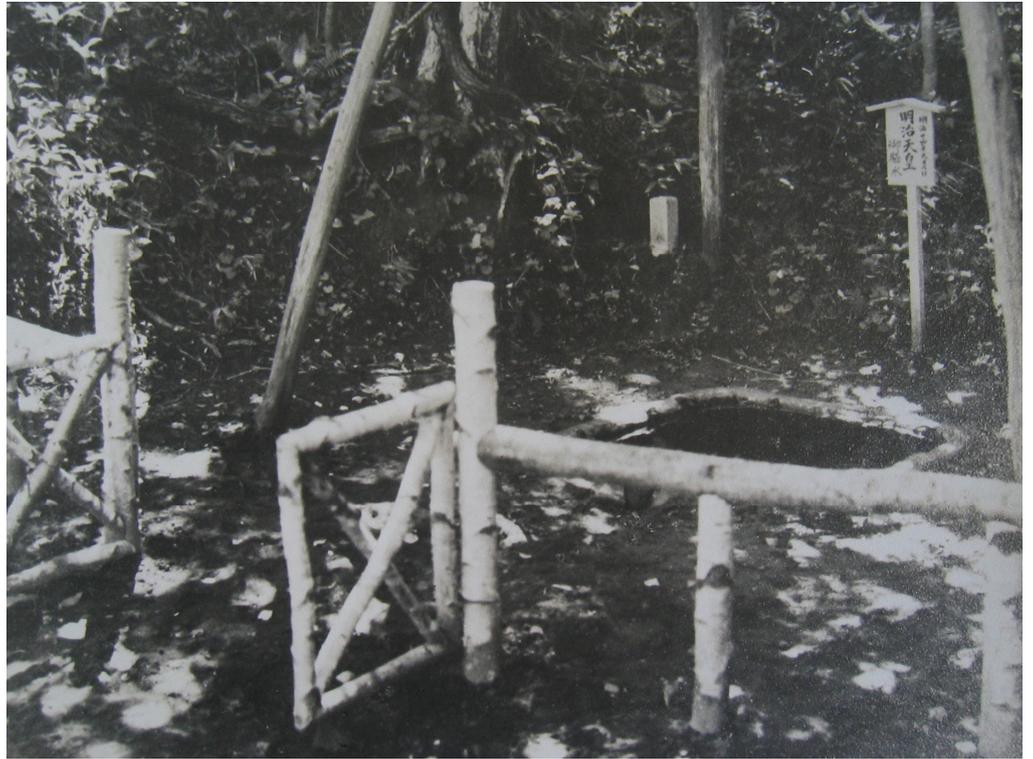
七飯町歴史館だより
第81号

ななえ古写真物語

VOL. 81

御膳水

凜々と涌く霊泉
昭和初期か？
蓴菜沼（西大沼）



「明治十四年九月北海道 御巡幸ノ時同月六日 茅部郡森村行在所御發輦國道筋 七飯村大字峠下村字蓴菜沼宮崎重兵衛方 御小休所トナリ沼ノ佳景二面スル八畳ノ間ヲ以テ玉座に充テサセタレタリ時ニ 村民捕獲セル鯉鮒ノ潑刺タルモノヲ 天覽ニ供シ奉ル（中略） 蓴菜沼湖畔ニ 明治天皇ノ御料ニ供シ奉リシ通称冷水ト称スル玲瀧玉ノ如キ霊泉アリ 凜々トシテ湧出ス」

これは、大正5年に発行された「七飯村史」に記された明治14年の北海道御巡幸の折に、天皇が宮崎旅館でお休みになられた時の様子を記録したもので、同様の話をピチャリ第8号「宮崎旅館」の項でもふれているのですが、その号では登場しなかった、蓴菜沼のほとりに湧いている霊泉を御膳水として供したことが記されています。

現在も、蓴菜沼のほとりに残る木道を通り、森の奥へ向かうと東屋風の建物があり、そこには滾々と水が湧き出て沼へ注がれていますし、近くには、蓴菜沼という名称の由来が記された看板も残されていたと記憶します。もしかしたら御膳水として供された歴史を知る人も少ないのかもしれない。

写真は、昭和初期に撮影されたものと考えられる霊泉の様子で、森と木柵に囲まれた場所に水が貯えられているのがわかります。またその奥には「明治十四年九月六日 明治天皇 御膳水」と書かれた立札が掲げられています。天皇に供された霊泉を御遺跡として保護し守ってきたことがうかがえますし、もしかしたら、現在とは異なり自由に飲んでもよかったのかもしれない。

こういった写真を改めて見ると、人知れず今も残されている史跡や文化財、そして自然を後世へしっかりと紡いでいくことが、当館の重要な役割なのだと感じます。

ところで、御膳水は他にも存在します。明治天皇は宮崎旅館でこの御膳水を堪能された後、峠を越えて現在の峠下にあった「峠下ホテル」で再び御休息されます。この時、竹田栄吉宅の井戸から汲まれた水が御膳水となり、栄吉へ五十銭を賜ったことが「明治天皇御巡幸記」に記されています。

ダムを持たず、地下に蓄えられた水で事足りる七飯町の水道水こそ御膳水なのかもしれません。そして、それを育てくれる自然の働きにこそ、感謝しなければならないのです。

6日

夜の博物館第3回講座は、「虫のはなし」と題し、道南虫の会に所属する小松利民氏を講師にお話し頂きました。まずは、昆虫とはどのような生き物で、どういった種類がいるのかをスライドや標本を用いて紹介。チョウとガの区別やハチとアブの見分け方など、クイズ形式で楽しみながら学びました。虫が苦手な方もいたようですが、不思議な世界を楽しんでいたようです。



16日

ジュニア探検クラブ「大沼を楽しむ」を開催しました。まずは、大沼の古い風景写真を見ながら、現在のどこかをあてるクイズから。班ごとに分かれて島めぐりをしながら探しましたが、かなり難しかったようです。昼飯は、自分たちで火起こしして、ジンギスカンを食べましたが、なかなか炭が燃えずに苦労していたようです。午後からは、湖に沈んだ遺跡へ赴き、土器や石器を探したのですが、なぜか水遊びに発展してしまうというハプニング(?)もあり、スイカも食べるなど、子どもたちは、大沼での一日を堪能していたようです。



友の会の皆さんが、野草園の整備をしてくださいました。

8月27日。職員が不足する当館の一番の懸念は、夏場の草むしり・・・。そんな私たちへ慈しみの心を与える当館友の会の皆さんが、大挙して野草園の整備を下さいました。街路樹として大きくなりすぎたマユミを大胆に剪定して下さいたり、青々と茂る雑草を力強く抜き取ってくれたり、見違えるほどきれいになり感謝が絶えません。暑い中、本当にありがとうございました。



1	水
2	木
3	金
4	土
5	日
6	月
7	火
8	水
9	木
10	金
11	土
12	日
13	月 体育の日
14	火
15	水
16	木
17	金
18	土
19	日
20	月
21	火
22	水
23	木
24	金
25	土 ジュニア探検クラブ・町民文化祭
26	日 第55回七飯町民文化祭
27	月
28	火
29	水
30	木
31	金

※10月の休館日はありません。

ツバメのねぐら入り

先日、町内某所でツバメのねぐら入りを見てきた。圧巻な景色だったし、町内でこういった自然を見れることはとても幸せだと感じました。



編集後記 ~tawagoto~

空気に秋を感じる頃。空高く広げられた青のキャンバスに、筆で描いたような雲が静かに流れ、朱に染まるトンボが泳ぐように羽ばたいている。

しかし、そんな心に彩りを与える穏やかな時間は、窓枠の向こう側でのみ流れているのであって、室内で暮らす我々職員は、羨望の視線すら向けることもなく、ただただひたすらにデスクワーク。つるべ落としのように沈む夕照に、なぜか涙しそうになるのはなぜだろう? (やまだひさし)

Richard ~ピチャリ~
第81号

平成26年9月20日 発行

七飯町歴史館

〒041-1193 亀田郡七飯町本町6丁目1-3

電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182

E-mail: rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp